

不定積分と定積分

Jacques Garrigue, 2019年6月25日

原始関数 関数 $F(x)$ が微分可能で, $F'(x) = f(x)$ ならば, $F(x)$ を $f(x)$ の原始関数という.

不定積分 関数 $f(x)$ が原始関数 $F(x)$ を持つならば,

$$\int f(x) dx = F(x)$$

と書き, それを $f(x)$ の不定積分と呼ぶ.

積分定数 $f(x)$ の不定積分は一意に定まらない. なぜならば, $F(x)$ を原始関数とすると, 任意の $c \in \mathbf{R}$ について $F(x) + c$ も $f(x)$ の原始関数である.

しかし, $F(x)$ と $G(x)$ が共に $f(x)$ の原始関数ならば, $(G(x) - F(x))' = f(x) - f(x) = 0$ なので, 定理 2.2.4 より, $\exists c \in \mathbf{R}, \forall x, G(x) - F(x) = c$, すなわち

$$\forall x, G(x) = F(x) + c \quad (c \text{ 定数}).$$

例 $\int \cos x dx = \sin x + c$ (c 定数)

$$\int \sin x dx = -\cos x + c, \quad \int \frac{dx}{1 + \cos^2 x} = \tan x + c$$

$$\int x^{-1} dx = \log x + c, \quad \int x^a dx = \frac{x^{a+1}}{a+1} + c \quad (a \neq -1)$$

定積分 $f(x)$ を区間 $[a, b]$ で連続な関数とする. 曲線 $y = f(x)$ と直線 $x = a, x = b, y = 0$ に囲まれた部分の面積を $f(x)$ の a から b までの定積分という

$$\int_a^b f(x) dx$$

(もしも $f(x) < 0$ の部分があれば, そこを負の面積として扱う)

面積が足せるので, $c \in [a, b]$ ならば,

$$\int_a^b f(x) dx = \int_a^c f(x) dx + \int_c^b f(x) dx$$

また, ベクトルと同様に, 逆方向の積分を負とすると, 足し算と整合性が取れる.

$$\int_a^b f(x) dx = -\int_b^a f(x) dx$$

定理 3.1.1 (定積分と不定積分) $f(x)$ が区間 I で連続とする. $a \in I$ について

$$F(x) = \int_a^x f(x) dx$$

とすると, $F(x)$ は $f(x)$ の原始関数になる.

定理 3.1.2 $f(x), g(x)$ が $[a, b]$ で連続とする.

$$(1) \int_a^b f(x) + g(x) dx = \int_a^b f(x) dx + \int_a^b g(x) dx \quad (2) \int_a^b kf(x) dx = k \int_a^b f(x) dx \quad (k \in \mathbf{R})$$

定理 3.1.3 $f(x)$ が $[a, b]$ で連続とする. $F(x)$ が $f(x)$ の原始関数ならば,

$$\int_a^b f(x) dx = [F(x)]_a^b \quad \text{ただし } [F(x)]_a^b = F(b) - F(a)$$

例 $\int_0^1 x^5 = \left[\frac{x^6}{6} \right]_0^1 = \frac{1}{6}$

定理 3.1.4 $x(t)$ が微分可能ならば, 置換積分ができる.

$$\int f(x) dx = \int f(x(t))x'(t)dt \quad \left(= \int f(x) \frac{dx}{dt} dt \right)$$

また, $f(x)$ が微分可能で, $G(x)$ が $g(x)$ の原始関数ならば, 部分積分ができる.

$$\int f(x)g(x) dx = f(x)G(x) - \int f'(x)G(x) dx$$

例 $\int \sin^2 x \cos x dx = \int u^2 \frac{du}{dx} dx = \int u^2 du = \frac{1}{3}u^3 = \frac{1}{3} \sin^3 x \quad (u = \sin x)$

例 $\int \log x dx = x \log x - x \quad (g(x) = 1 \text{ で部分積分})$

定積分の計算 それぞれを定積分に応用すると, 以下の定理が得られる.

定理 3.1.5 $f(x)$ が区間 I で定義され, $x(t)$ が微分可能で, $x([\alpha, \beta]) \subset I$ ならば.

$$\int_{x(\alpha)}^{x(\beta)} f(x) dx = \int_{\alpha}^{\beta} f(x(t))x'(t)dt$$

定理 3.1.6 $f(x)$ が区間 $[a, b]$ で微分可能で, $G(x)$ が $g(x)$ の原始関数ならば

$$\int_a^b f(x)g(x) dx = [f(x)G(x)]_a^b - \int_a^b f'(x)G(x) dx$$

基本的な不定積分 多くの原始関数はその導関数から直接に推測できる. しかし, 非自明なものもあり, 以下によく使うものを記す. 教科書の表も参考にして下さい.

$$\begin{aligned} \int \frac{dx}{\sqrt{a^2 - x^2}} &= \text{Sin}^{-1} \frac{x}{|a|} \\ \int \frac{dx}{\sqrt{x^2 + a}} &= \log |x + \sqrt{x^2 + a}| \\ \int \sqrt{a^2 - x^2} dx &= \frac{1}{2}(x\sqrt{a^2 - x^2} + a^2 \text{Sin}^{-1} \frac{x}{|a|}) \\ \int \sqrt{x^2 + a} dx &= \frac{1}{2}(x\sqrt{x^2 + a} + a \log |x + \sqrt{x^2 + a}|) \\ \int \frac{dx}{a^2 + x^2} &= \frac{1}{a} \text{Tan}^{-1} \frac{x}{a} \\ \int \log x dx &= x \log x - x \end{aligned}$$

宿題 2.4.4, 3.1.1